

栃木県におけるオオタカおよびチョウゲンボウの調査・保護活動

遠藤孝一(オオタカ保護基金・日本野鳥の会栃木県支部)

1. オオタカの調査・保護活動

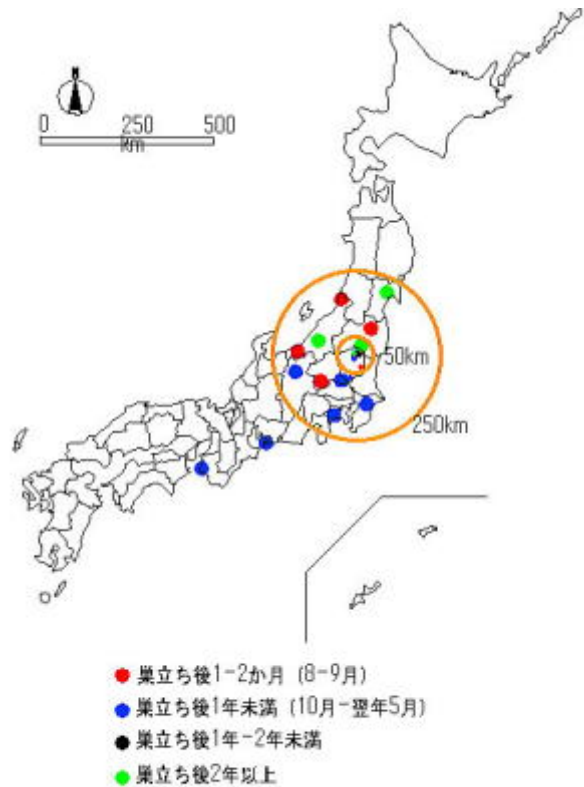
オオタカの調査・保護活動は、栃木県北部の那須野ヶ原(西那須野町・黒磯市など)にて行っている。この地域では、1980年以前はオオタカをはじめとして各種のワシタカ類で密猟が横行していた。それを防止するため、1981年に密猟監視を始めたのが活動の発端である。現在では、その活動は「オオタカ保護基金」に引き継がれ、繁殖状況のモニタリング、行動生態調査、生息環境の保全活動など、総合的な活動に発展している。

標識調査とのかかわりが深い活動は、地上波発信機を利用した成鳥および幼鳥の行動追跡、標識脚環と衛星波発信機を用いた幼鳥の分散追跡である。前者については、[日本鳥類標識協会1999年全国大会\(米子市\)のシンポジウム時に発表した](#)ので、今回は後者について発表する(編注:この原稿は日本鳥類標識協会2001年全国大会(渡良瀬遊水地)のシンポジウムの講演要旨から作成した)。

巣内雛および巣立ち幼鳥への標識は1987年より実施しており、現在まで336羽(一部那須野ヶ原以外の栃木県内含む)に標識をつけた。この間の回収例は25例で、回収率は7.4%と高い。回収場所は、栃木県内はもとより、遠くは宮城県、新潟県、長野県、和歌山県などに及んでいる。



標識足環を付したオオタカの巣内雛



那須野ヶ原から巣立ったオオタカの回収位置と経過日数

また、衛星波発信機を、2000年に1羽(雌)、2001年に2羽(雌雄各1)に装着した。2000年の個体は、8月下旬に栃木県を南北に縦断し、秋から冬にかけては渡良瀬遊水地周辺で過ごした。2001年の個体については現在追跡中であるが、8月末現在、雌は福島県南東部に、雄は茨城県南西部に滞在している。このことから、巣立ち後の幼鳥は1-2か月で独立し、その後短期間でかなり広範囲に分散することがわかってきた。



発信機を付したオオタカの幼鳥



[地上波発信機を利用した成鳥および幼鳥の行動追跡のページも参照](#)

[オオタカ保護基金のHPはこちら](#)

2. チョウゲンボウの調査・保護活動

チョウゲンボウの調査・保護活動は、栃木県北部の矢板市山田地区にある集団繁殖地にて行っている。この繁殖地は、箒川に面したふたつの岩山からなり、1910年には17つがいの営巣が記録されている。1960年代に一時、繁殖記録が途絶えたが、1970年代後半に人工的に巣穴を3つ掘って以来、自然の巣穴1つと人工巣穴3つの計4つの巣穴を使って毎年15羽前後のヒナが巣立っている。この岩山は、凝灰岩質のため雨水による侵食を受けやすく、1990年夏の台風で人工巣穴の1つが崩壊した。また、巣穴の入口が草木によって塞がれて利用できなくなったこともあった。



人工的に掘ったチョウゲンボウの巣穴



標識後、巣穴に戻した雛 足環が見える

このような事情から、1996年に巣穴の維持と生態観察を主な目的として「チョウゲンボウ・プロジェクト」を発足した。2000年秋には崩れて無くなっていた巣穴を新たに掘り直したところ、翌年営巣に成功した。1997年からは巣内雛への標識も行っている。この間に標識した巣内雛は68羽である。また、2000年からはカラーリングも併用している。これまでの回収例は埼玉県熊谷市内の1例のみであるが、2000年には巣立ち約2ヶ月後に、長野県佐久市内でカラーリング付きチョウゲンボウが発見された。このことから、巣立ち後の幼鳥は数ヶ月でかなり広範囲に分散するらしいことがわかってきた。



標識したチョウゲンボウの雛
金属足環とカラーリングが見える



簗川で巢内雛に標識したチョウゲンボウの回収例

※チョウゲンボウの写真と図は河地辰彦氏提供
チョウゲンボウプロジェクトについては[河地氏のHP](#)を参照

[このページのトップへ戻る](#)

[標識調査の意義へ戻る](#)